

2018年1月21日(日) 聖書：Ⅱ歴代誌20章1-11節 タイトル：勝利への道

序 論

- 韓国ピョンチャンでの冬季オリンピックが後10日ほどで始まろうとしている。日本は、1964年の東京での夏季オリンピックと、1972年の札幌と98年の長野の冬期オリンピックの開催国となってきた。そして、2年後の東京で再度の夏のオリンピック開催国となるべく準備をしている。
- その意味で、開催国としての、苦勞、負担、緊張、興奮、期待を知る者として、今回の韓国でのオリンピックを覚えて、「お手並み拝見」的な、他人事としてではなく、隣国、隣人、友人の国として、北朝鮮問題を抱えながらの大会が成功することを祈る者でありたい。
- 言うまでもなく、オリンピックはスポーツの祭典である。そこでは、スポーツの業とスピートが競われ、順位が問われ、勝敗が問われる。
- 「近代オリンピック」は、ご存じのように、クーベルタン男爵の提唱で、1896年に始まったが、素晴らしいことは、1960年からは、健常者だけでなく、身体的に障がいを持つ方々のためのパラリンピックも始まったことである。
- そして、そのパラリンピックの競技種目も、参加者も、毎回どんどん増えていると聞く。嬉しいことである。今やオリンピックは、みんなのものである。
- 沢山の若いアスリートたちが、懸命に生き、練習し、目標に向かって懸命に努力している姿は美しい。励まされる。目前の冬期オリンピック、また2020の東京オリンピックが楽しみである。
- さて、パウロ、また聖書は、しばしば信仰生活の在り方を、スポーツ競技に譬えている。ヘブル12章1-2節、またⅠコリント9章??節がその例である。
- 即ち、信仰生活は、戦いの世界なのである。趣味や趣向の世界ではない。だから勝たねばならないのである。
- 聖書は、クリスチャンが、この戦いで「勝つ」ことを期待している。実は、そのために、イエス様は私たちを愛し、私たちのために十字架に掛かり、甦り、福音を完成してくださったのである。
- そのことを記している聖書を少し見たい。
 1. パウロは言う。ローマ8章37節「これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです」。Ⅰコリント15章57節「神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えて下さいました」。
 2. イエス様は言う。ヨハネ16章33節「あなたがたは世にあっては艱難があります。しかし、勇敢でありなさい。私はすでに世に勝ったのです」と。
 3. ヨハネは言う。Ⅰヨハネ5章5節「世に勝つ者とは誰でしょう。イエスを神の子と信じる者ではありませんか」。
- 感謝すべきことは、世の中の勝利は、誰かが勝つためには、誰かが負けなければならない。しかし、この聖書がイエス様において約束している勝利は、聖書の示す信仰の法則にしたがうなら、誰でもが経験できる勝利である。即ち、人を蹴落とすことなく、すべての人に約束されている勝利である。
- それでは、聖書が示す、その勝利の法則、道とは何か？ そのことを、今日は、聖書の歴代誌Ⅱ20章に記されている、ユダヤの国が経験した大きな戦いと勝利の出来事から学びたい。
- その戦いと出来事について簡単に説明すると、
 1. 当時、イスラエルの国は、南北に別れていたが、南王国のユダヤの王はヨシャパテであった。彼は、初めのうちは、忠実に神様に従って来た良い王様であったが、次第に、神様を恐れない北王国のアハブと提携を結ぶなど信仰に妥協と揺らぎが見えて来た。
 2. そんな頃、周囲の敵国であるアモン人とモアブ人がが連合して攻めて来たのである。聖書には、その数はハッキリ書いていないが、12、15節を見ると、その敵が余りの「大軍」であったので、ユダヤの人々が失望、落胆、恐怖に陥ってしまうほどだったと記している。
 3. 問題は、その大きさだけではなく、敵の大軍は既に目の前に来ていたのである。2節は言う。「早くも、彼らは、ハツァツォン・タマル、即ちエン・ゲディに来ています」と。いつか来るかもしれないと言う敵ではなく、すぐそこまで至近距離に来ていた。一刻の猶予もなかった。
 4. そんな大軍を目の前にして、ヨシャパテ王を筆頭にユダヤ人全員が恐怖でわなないた。王は早速に国民に「断食して祈るように」求め、人々は集まって王様と共に祈り始めた。

5. すると突然、会衆の中から一人の男が立ち上がって預言をし出した。その信仰的預言の前に圧倒された王様と全会衆は、その場でみなひれ伏して礼拝をし、しかも、その礼拝は大きな賛美で閉じられたとある。
 6. 翌朝、王様は、民と相談し、作戦を練った。しかし、その作戦は、実に稀有で、非常識でさえあった。それは、一番激しい戦いをするべき隊の戦闘に、武器を持たない、「賛美チーム」を行かせると言うものであった。
 7. この賛美チームが、声を上げ始めたとき、「主は伏兵を設けて」、大軍である敵を打ち負かせ、ヨシャパテ王とイスラエルに大勝利をもたらしたと言うのである。
 8. 伏兵とは、「不意に攻撃するため、敵の行く手に隠して配置する兵隊・軍勢である」が、神様は、私たちに勝利を与えるために「伏兵」を用意しておられる。
- 私たちは、この出来事のなかに、「勝利の人生への法則・道」を見ることができる。それらの法則・道とは何か？

本 論

I. 私たちの人生と信仰生活を、勝利へと導く、最初の道はどこから始まるのか？ それは、まず、自分の弱さと無力を認め、必死に神様に助けを求めることから始まる。

A. ヨシャパテの場合を見たい。

1. 聖書は3節で、彼は「恐れて」と記す。彼は、強くあるべき一国の王であったが、実際、その戦いが「怖かった」のである。
 - (1) 彼の敵軍は、一国ではなかった。連合軍であった。必然、敵軍の数は、圧倒的に多かった。それゆえ、ヨシャパテ王は、戦うのが怖くて、震えていたのである。
 - (2) 私たちは、しばしば「数」や「量」によって恐れ、奴隷となる。
 - 敵が、相手が、対象となる人数が、大人数であるとき、恐れる
 - 支払うお金が大金であるとき、借金するお金が大きいとき、恐れる
 - 大きな仕事、などなどで「怖くなる」のである。
 - そして、無理だ、できない、もう駄目だ、となる。
2. ヨシャパテ王も怖かった。しかし、素晴らしいことは、ヨシャパテ王は、その恐れ、自分の弱さを隠さなかったのである。むしろ人々の前にも、神の前にも、その弱さをさらけ出した。
 - (1) 人々の前に：3節を見ると、彼は、人々に断食して祈るように求め、訴えた。彼は、国民の前に、強いリーダーを気取らなかった。自分の弱さを晒した。
 - (2) 神の前に：更に、それは、神への祈りの言葉にも表れていた。彼は告白して言う。「このおびただしい大軍に当たる力は、私たちにはありません。私たちとしてはどうして良いか分かりません。」と。
 - (3) 特に後半の言葉「私たちはどうして良いか分かりません」は、唯に、プライドを捨てた言葉と言う以上に、王様のようなリーダーとしては、一番言いたくない言葉、民衆に不安を与える言葉あり、彼のリーダーとしての資質をさえ揺るがせる告白である。
3. 恐れたのは、王様だけではなかった。状況を知った全国民も恐れた。
 - (1) だから、彼らは、一斉に集まり、主の助けを求めた。4節
 - (2) だから、ヤハジエルは、「恐れてはならない。気落ちしてはならない」(15節)と、励まされなければならなかった。

B. 神様は、自分の弱さを認め、告白し、助けと憐みを求める人に近くおられ、助られる。

1. パウロもその一人であった。
 - (1) 彼は、人間的に見ると、最も偉大な使徒、宣教者として、精神的に強そうな人であった。
 - (2) しかし、彼もまた、実際には、肉体に与えられた「とげ」と呼ばれる「弱さ」のゆえに、しばしば心も身もくじけそうになった。
 - (3) 彼は、それを率直に、正直に、しかも、何度も何度も、恥も外聞もなく、しつこく、神様に訴え、助けを求めたのである。それが、Ⅱコリント12：7-10に記されている。(「3度」とは「完全数」で、象徴的に「幾度も」を意味していた)。

- (3)だから、そんな弱さを曝け出す彼に、神様は、そばにおられ、励まして言われた。「私の力は、弱さのうちに完全に現れる」(9)と。
2. 度々、引用するブルックリン・タバナクル教会の牧師ジム・シンバラ先生もその一人である。
- (1)彼は、正に潰れかけた教会、麻薬と売春婦の町と言われる地域にあった教会、会衆はわずか20名にも満たない小さな教会、借金まみれで牧師給も十分に払えない教会、会堂のベンチでさえ壊れかけていて、うっかりすると安心して座れない教会に遣わされたのである。霊的にも、何をアピールしても会衆に響いていない教会であった。
- (2)彼自身にしても、十分なと言うか、正式な神学教育をさえ受けていなかった。何もかもが十分ではない状態でのご奉仕の日々であった。
- (3)そんな中で、遂にある日曜日の夜の集会で、彼は説教中に行き詰り、原稿を握りつぶして、講壇をおりてしまった。彼は、恥かしさの中で、会衆に祈りを求めた。
- (4)その晩から何かが変わり始めるのである。彼はその晩、ハッキリと確信するのであった。彼は言う。「あの晩、驚くべき真理を発見したのです。神は弱さに引き付けられるお方であること。また如何に切実に、主を必要としているかをへりくだって素直に認める者たちを、主は捨てておられない、と言う真理です」と。彼は変わり、やがて教会も人々の注目を集めるほどに変わった。
3. しかし、自分の弱さを認め・晒した私たちが注意しなければならないことがある。
- (1)それは、多くの人が、自分の弱さを認め、曝すところで終わってしまうことである。即ち「私は弱い、私は弱い」と繰り返し、泣き言を言うところで留まってしまう事である。
- (2)それでは、何にも起こらない。ノン・クリスチャンと同じである。弱さを知ったら、認めたら、そのために「祈る」必要がある。弱さは私たちを祈りへと追い込むのである。
- パウロは弱さを知ったとき、どうしたか？ 8節「これを私から離してくださいと3度まで願った」、即ち、祈ったのである。
 - ジム・シンバラ先生も、そのような失望の後、神様から「祈り」による教会建設を示され、これから、この教会の目標は、日曜礼拝に何人集まるかではなく、祈禱会に何人集まるかであると宣言し、そこから教会が変わり始めたと記している。

II. 勝利の人生への道における次のステップは、神の前に「ひれ伏す」ことである。

A. ヨシャパテ王と民衆が、自分たちの弱さを曝け出した後、次に何をしたかを聖書で見たい。

1. 18節を見ると、日本語新改訳聖書では2回「ひれ伏した」と言う語が使われ、最後に「主を礼拝し」たとなっている。
2. 「礼拝」と訳されている言葉の元の意味は、「膝をついて顔を地面に臥せる行為」である。
3. 即ち、弱さを認め、それを神様に訴えた彼らが次にしたことは、神の前に「ひれ伏す」ことであった。
4. それは、奴隷の行為であり、敗戦将軍が凱旋将軍に対して行う行為であった。

B. 実は、この行為こそが、聖書的な「礼拝」の意味である。

1. 今日、多くの人々、またクリスチャンが、どこかで、「礼拝」することの意味を間違えているように感じる。「礼拝」とは、単に毎週日曜日(の朝)に、集ってみなで賛美したり、何かためになる、励ましになる聖書のお話を聞く「集会」に参加することだと思っている。
2. しかし、それは、どこまでも礼拝のための手段であって、礼拝そのものではない。礼拝とは何か？、その答えは、ローマ書12章1節に書かれている。即ち、「・・・」：
 - (1)あなた方の体を：あなたの全部を、全人格・全生涯を
 - (2)生きた：毎日の実生活の中で、
 - (3)供え物として：神さまへの捧げもの、贈り物として、
 - (4)神のあわれみのゆえに：神の愛への応答として(感謝のいけにえとして)
 これが、わたしたちのなすべき「礼拝」の本質である。
3. 即ち、礼拝とは、賛美を通し、メッセージを聞き、受け入れ、実践することを通して、
 - (1)その手段が何であれ、どんなスタイルであれ、大会衆であれ、少人数であれ、
 - (2)神の主権の前に、喜んで、感謝の生贄として、自分自身を明け渡すことである。即ち、

●心も体も、●人生のすべて、即ち、●時間も、●お金も、●野心も、●キャリアも、
●結婚も、●夫も、●妻も、●子供も、●友達付き合いも、何もかも・・・を捧げて、
(3)「私のすべては、あなたのものです」と言って、神の前にひれ伏すことである。

3. 私たちは、私たちが加わっている人生の戦いの将軍ではない。所有者でもない。人生の戦いの将軍・所有者はイエス様である。私たちは、そのイエス様に対して、ひれ伏し、降伏し、生涯の服従と信頼と忠誠を誓うのである。これが礼拝である。
4. イエス様は、勝利の将軍、凱旋将軍である。私たちの勝利は、このイエス様の凱旋軍に連なることによって来るのである。パウロはそのことをⅡコリント 2 章 14 節で、描いている。

B. しかし、この降伏として、神様に自分を明け渡す意味での礼拝は、多くの人々に「人気」がない。

1. リック・ウォーレンは、その著書、「人生の5つの目的(Purpose Driven Life)の中(10日目)でこのように言う。「礼拝の本質は、降伏にあります。(しかし) 降伏という言葉はあまり人気がありません。服従という言葉と同じくらい嫌われているでしょうか」と。
2. 人々は、楽しいお話し、役に立つお話し、楽しい音楽を求めて礼拝に来る。それら自体は決して悪いことではない。しかし、同時に、それは礼拝の本質ではない。
3. 礼拝の本質、本当の礼拝は、イエス様に降伏し、明け渡し(Surrender)ことから始まる。
4. でも私たちは、誰かに屈服して、自分を自分以外の誰かに渡すことを嫌う。たとえそれが神様であってもである。
5. しかし、そこにいつも私たちの敗北の原因がある。勝利はどこからくるか？ それは、イエス様に降伏し、イエス様にあなたのすべてを明け渡し、イエス様の凱旋の行列に加わることから来ると聖書は言う。
5. George Mattheson の賛美：Make Me a Captive, O Lord
主よ、我をば捕らえたまえ さらば我たまは解き放たれん
我が刃を砕きたまえ さらば我が仇(あた)に打ち勝つを得ん
Make me a captive, Lord, And then I shall be free.
Force me to render up my sword, And I shall conqueror be.
I sink in life' s alarms When by myself I stand;
Imprison me within thine arms, And strong shall be my hand.
6. キリストの御前にひれ伏す(真の礼拝)とき、私たちは人生の戦いにおける大きな勝利へのステップを踏み出すことになるのである。

III. 最後のステップは、「賛美」である。

A. そもそも、これは変な(奇妙な)戦いであった。

1. Alexander Maclaren という有名な聖書講解者は、この戦いを “Strange Battle” と呼んだ。
2. なぜ Strange なのか？ その理由は、戦闘軍団の先頭、即ち一番危ない部分に、戦いとは全く無縁の賛美チームが配置されたことである(3節)
3. そして、彼らが賛美し、歌い始めたとき、神様は、伏兵を設けて(英語では Set ambushes against)、アモン人、モアブ人の連合大軍を打ち破ったと聖書は記す。
4. 何と Strange で奇妙な戦争か？ こんな戦い方をする軍隊を見たことがない！？ こんな勝利も見つけない。だから Strange なのである。

B. このことは何を意味しているか？ この戦いが、「私たちの戦いではなく、神様の戦いである」ことである。

1. ここで明らかなことは、この賛美チームのメンバーが、どこかのスパイ・アクション映画のように、持っていた楽器が突然武器に変わって、戦って勝利を得たのではない。
2. 神様が準備した天の軍勢とも言うべき「伏兵」による勝利であった。
3. 私たちの人生、信仰生活における勝利は、私達自身の力ではなく、神様によるのである。
(1)思い出して頂きたい。ポップ・ホープのコメディ西部劇映画の話。二丁拳銃の名手と自負している男が、自分は百発百中の拳銃の腕前だと思い込んでいたが、実は、それは、奥さんがいつも彼の陰から撃っていたのである。戦っていたのは、彼でなく、奥さんであった。

(2)これこそが、正に私たちと神様の関係である。自分が戦っているように思うけど、実は神様が戦っているのである。

4. モーセとイスラエル民衆が、奴隷にされていたエジプトを脱出したとき、エジプト軍に追いかけられ、前には、到底歩いたり、泳いだりして渡れないような紅海が、行く手を阻んでいた絶対絶命のとき、人々はパニックになった。その時、モーセは言った。「主があなたがたのために戦う」(出エジプト 14 章 14 節)と。
5. 今日の出来事の中でも、神の人、ヤハジエルを通して神様は言われた。「これはあなた方の戦いではなく、神の戦いである」(15 節)と。
6. 神様が戦われるとき、勝利は私たちの物である。

C. ここで大切なことは、神様は「誰」のために戦ってくださるのか?である。答えは、「賛美する者」である。

1. 詩篇 22 篇 3 節でダビデは、神様についてこのように言っている。「あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます」、
2. 神様は、私たちの「賛美」を愛され、「賛美」する人と共に、近くおられる。神様は弱さを自覚している人たちに引き付けられると同様に、賛美する人にひきつけられるのである。
3. 言い換えるなら、あなたがもし賛美を愛する人なら、神様はあなたの近くにおられ、祝福し、必ずあなたに勝利を与えられることを確信してよいのである。
4. 詩篇 8 篇 2 節と、それを引用されたマタイ 21 章 16 節とを読み合わせると、聖書のメッセージが見えて来る。それは、幼子のような心をもって賛美する人の賛美に神様は、敵をも打ち倒す力を与えられるというのである。
5. ヨシャパテ王と民衆たちについて、ここで 4 回も、「賛美」「歌う」という言葉が使われている(19 節、21 節、22 節)。
6. 神様が、ヨシャパテ王とイスラエルの人々のために戦い、勝利を与えられた理由、神様が伏兵を設けて彼らを助けた理由は、彼らが神様を「賛美」したからであった。
7. 神様は、賛美する人を愛される。神様は賛美する人のそばにおられ、勝利を与えられる。

C. 彼らのした「賛美」の意義:

1. ここで、特に、このヨシャパテ王と民がした賛美で特筆すべきことは、それが決して気分が良いから歌ったのでも、好きだから、気まぐれに歌ったのでもないことである。
2. 賛美とはただ歌が好きで歌うことではない。この場に賛美ほど似合わないものはなかった。
3. 見えるところは、相変わらず敵の大軍団を前にした恐れ以外何物でもなかった。自分の弱さも同じであった。何も状況は変わらなかった。しかし、彼らは賛美したのである。
4. しかも、無防備のままであった。そのような状況の中での彼らの賛美は、勇気とそれを支える信仰の表現であった。
5. それは、彼らにとって、命がけのものであった。武器も持たないで戦闘軍団の先頭に立つことは、「正気ですか?!」と聞かれるほどに、勇気のいる行為であった。
6. そこには、更に、その勇気を支える信仰もあった。主の勝利を支える信仰であった。
7. 私たちは、どうだろうか? 勝利を呼び込む賛美に溢れているだろうか?

結 論

- 集会で、礼拝で、もっと歌いましょう。大いに賛美しましょう。集会や礼拝のプログラムのために歌うのではなく、賛美するために賛美しましょう。
- しかし、集会だけでなく、個人で、家庭で、歌いましょう。賛美の溢れる家庭となりましょう。ある人の家に行くと、賛美の CD が家の BG として流れている。車の中で聞いたり、歌う人もいる。
- 私たち夫婦も、結婚したその日から、賛美してきました。結婚披露宴のとき、非常識にも、夫婦二重唱で 10 曲歌った。
- 日本にいたときは、忙しすぎて、家庭生活もなく、できなかったが、特にアメリカに来てから二人でよく夕食後、彼女がピアノを弾いて二人で歌って励まし合ってきた。最近、私が少し演歌づいてきているので家内は不満げであるので、私も、もっと賛美に溢れる牧師になろうと思っている。
- 今日は、しめくり、家内と結婚以来、私たちのテーマソングのようにして、折に触れて、歌ってきた賛美を一つ歌わせていただきたい。「救い主イエスと共に行く身は」である。